「明海日本語」第八号

山東京伝『初衣抄』註釈（二）

山本陽史・松田高行

③ 陽成院

ハツ五オ　ハツ六オ　ハツ五ウ　ハツ六ウ

〈やうりうくわんぜをん〉楊柳観世音　仏像図彙

〈やうきひ〉楊貴妃　事ハ見　長恨歌　楊妃外伝

〈やうじやおいく〉楊枝屋阿幾　浅草寺内　事見　指面草（サシモクサ）

〈やうめいのすけ〉楊名介　源氏夕顔巻　つれづれ草　三ケノ口決

〈やうきやう〉楊香　二十四孝詩　追テ虎ヲ助クレ父ヲ　陽成院（ハツ五オ）」

〈やうぜいゐん〉陽成院

・**陽成院**　平安時代前期の第五十七代天皇。清和天皇の第一皇子。光孝天皇に譲位し、上皇となる。

・**楊柳観世音**　三十三観音の一つ。右手に楊柳の枝を持つか、または座右の水瓶にこれを挿すこともある。衆病を消除することを本誓とする観音。

・**仏像図彙**　五巻五冊。仏像及び道具の画集。元禄三年成立。天明三年に画工土佐秀信によって改版増補され、以降寛政四年・八年、天保八年、さらに明

治期にまで再版される。この版行の状況から天明期には広く流布していたものと見られる。その巻之二に楊柳観音の項がある。

・**長恨歌**　白楽天の詩。七言古詩一二〇行。唐の玄宗皇帝と楊貴妃との愛と、国の乱れ、楊貴妃の殺害とその悲しみを詠う。日本でも平安時代から広く知られた。『古文真宝前集』に「参議雅経」の項で引く「琵琶行」とともに所収されている。『白氏文集』にも収載。

・**楊妃外伝**　本書は唐代に成立した小説『楊太真外伝』のことと考えられる。この作品名を京伝が何で知ったかは未考。

・**楊枝屋**　浅草寺の境内にあった床店で、美人の看板娘を置いて楊枝、五倍子（ふし）、酒中花などを売った店。

・**おいく**　『通言総籬』に「羅月がいもうとは、いつ梅とやうじやのおいくを、そうじめへにしたといふかほだねえ」とあり、『日本古典文学大系　黄表紙洒落本集』の水野稔氏註に「浅草観音随身門内の楊枝屋柳屋八右衛門の娘。当時評判の女」とある。

・**指面草**　京伝作の滑稽本。天明六年刊。「乗物の中に香留（かをとめ）る梅は武士（もののふ）」の巻に浅草寺内の楊枝屋の看板娘枝屋おいくが登場する。「銀杏の葉飛で楊枝屋おいくが靺鞨（まへだれ）に模様をうつし」

・**楊名介**　平安時代以降、名目だけで職掌も俸録もない国司の次官。

・**源氏物語　夕顔巻　三ケノ口決／徒然草**　楊名介は、『源氏物語』夕顔の巻では、夕顔の家主。惟光の隣家。その妻が夕顔の西の京の乳母の子。『徒然草』には「楊名介に限らず、楊名目といふものあり。故事要略にあり」とある。書物を擬人化した京伝作黄表紙『御存商売物』（天明二刊）では、『唐詩選』と『源氏物語』が通人に擬人化されて登場。『唐詩選』『源氏物語』の命令を受け、地本たちに下知をする役割を与えられている。その説教を聞いて青本は「見台へ乗る衆はまた格別だ」と感想を言っている。また京伝作黄表紙『江戸生艶気樺焼』（天明五刊）では、一丁裏に艶二郎の背景に『源氏物語』が『伊勢物語』とともに同じ函に入れられている様子が描かれる。『徒然草』は版本が多数出ているし、註釈も多く出版されている。註釈の中から『増補鉄槌』の寛文版本を見ると、註に「源氏夕顔の巻にある事なり」「源氏三ケの大事と云」とあり、『徒然草諸抄大成』にも同種の註が付されている。前項はあるいはこれらのいずれかの註から引いたものではないだろうか。『徒然草』については京伝は天明三刊『狂文宝合記』に「女の髪にてよれる綱　一名糸柳」を寄せているほか、『小紋裁』（天明四刊）・『忠臣水滸伝』（寛政十一・十三刊）等多数の作品に趣向として使っている。「口決」は、文書に記さない、口伝えの秘伝。「三ケノ口決」とは、源氏物語における三つの秘伝のうちの一つの意。

・**楊香**　二十四孝の一人、魯の楊香は、十四歳の時、父と稲刈りに出、父が虎に襲われた時に自分の身を猛虎の前に投げ出し、猛虎を感動させて、親子とも命が助かったという。近松の『国性爺合戦』第二には「廿四孝の楊香は孝行の徳によって。自然と遁（のが）れし悪虎の難」という表現がある。

・**二十四孝詩**　二十四孝は中国で古来有名な孝子二十四人の総称。元の郭居敬がその伝を記した教訓書を著したのによる。『二十四孝詩』はそれを詩としたもので、単独の版本としても行われたが、節用集等の雑書類にも載る。例えば『頭書増字節用集大成』（元禄十刊、『節用集大系』二十三所収）には「二十四孝和解」として詩と絵入りの解説が載る。

つくはねの峯よりおつるみなの川こいぞつもりてふちとなりぬる

むかし武蔵の国葛西に孫右衛門といふ水呑み百姓あり。兄弟の娘をもてり。それがことをよめる歌也。

・葛西　隅田川以東の、もと下総国葛飾郡の、江戸川と中川とに挟まれた一帯。江戸初期、武蔵葛飾郡として、武蔵国に編入された。「ここは江戸の近郊でありながら、典型的な田舎と見られていた。そして野菜類を江戸へ運んできた舟が、帰りに肥桶を積んで行くので、糞舟を葛西舟と呼んだことなどが、軽蔑感をさそったのであろう。」（『江戸文学地名辞典』）。同書に「葛西船の悪く臭きまで、入乱れたる舟、いかだ、誠にかかる繁栄は、江戸の外に又有るべきにもあらず」（風来山人『根無草』）「糞舟のはなもちならぬ狂歌師も葛西みやげのなばかりぞよき」（朱楽管江『狂言鶯蛙集』）を引く。

つくはねの○つく羽ね也。田舎は正月の休みのうちは賑やかにて、かの兄弟の娘もおしやらくをやり、羽子をついて遊ぶこと也。

（頭註　**ハツ五ウ**）

つくはねの

後拾遺集序　つく羽のつくぐと白糸の思ひ乱れいく　下略

河東松之内　軒よりつたふつくはねの笹にからまり

同書　恋ぞつもりていつの間に

・つくはね　本歌では「筑波嶺」の意であるが、「つくばね（衝羽根）」すなわち羽根つきとした。

・おしゃらく　「お洒落」。女性がおしゃれ、おめかしをすること。

・後拾遺集序　当時八代集・二十一代集の版本が行われており、それに拠ったものか。『後拾遺集』序には、「すがのねのながき秋の夜つくばねのつくぐと。しらいとのおもひみだれつゝ」とある。後年になるが京伝は合巻『笠森娘錦乃笈摺』（文化六刊）で和泉式部の歌を引き、「後拾遺集にあり」と記す。

・河東松の内　河東節は十寸見（ますみ）河東を祖とし、享保・安永・天明の間、盛んに行われ、高尚な語り振りとして通人に喜ばれた。洒落本『遊子方言』（明和七年刊）の発端に「今やぼな侍がうたをうたう。河東節を、ならはしやい」、黄表紙『高慢斎行脚日記』（恋川春町作画、安永五（一七七六）年刊）には「おのくいろくの遊芸も高慢をつくし、いまは三すじの糸のとりぐに、義太夫・豊後・河東に昼夜のわかちもなく」、同「このあとはおれさまが、わつさりと河東にして、十寸見といふところを聞かしやしやう」。俗に音曲を「河東かみしも、外記はかま、半太羽織に義太ももひき、

豊後可愛や丸裸」と称する。

河東節「松の内」は竹婦人（または鶴見一魚とも）作詞。初代十寸見河東作曲。享保三年正月、江戸市村座「傾城富士の高根」において初演された。半太夫脇語りであった初代十寸見河東が初めて独立して河東節という新風を興した記念の浄瑠璃。大磯の郭の元日から七草までの情景を綴る。『日本歌謡集成』第十一巻に所載の歌詞では、「二日は茶屋にゐの日にて。手まづさへぎるはご板に。軒よりつたふ。つくばねの笹にからまりもすそへ。まりが〳〵袖くぐる手どりに一つ袂へ二つさゝにからまり。もすそへまりが〳〵そでくぐるてどりにひとつたもとへふたつ恋ぞつもりて。いつのまに。ちよつと百ついた。まりの数、とんと落ちなば名はたたん」。「名や」ではなく「名は」となっている。京伝作黄表紙『江戸生艶気樺焼』（天明五刊）の「道行興鮫肌」に引かれているのをはじめ、『小紋新法』（天明六刊）・『新造図彙』（天明九刊）・『繁千話』（寛政二刊）・『先開梅赤本』（寛政五刊）等、京伝作品にしばしば引かれている。

峯よりおつる○あねを峯（みね）といひ、妹（いもと）をおつるといふ。峯よりはおつるが美（うつく）しかりし也。

（頭註　**ハツ五ウ**）

峯よりおつる

近江八景歌　堅田落雁　峯あまた越（こ）えてこしぢに松（まつ）ちかき

堅田（かたゞ）になびきお鶴雁金

武部（タケベ）源蔵門人　涎繰（ヨダレクリ）文庫（ブンコ）

（頭註　**ハツ六オ**）

名頭文字ニ曰　峯定鶴亀松竹

画本八十宇治川　猿人狂ノ歌ニ

頼朝（よりとも）はぞん鶴しさいあり鶴が鶴が岡にて鶴はなし鶴

荘子ニ曰　鶴ハ不（セズ）ニ日（ヒニ）浴（ユアミ）一白

おつるは一日湯浴（ゆあ）みせずともうつくしかりしなり

・近江八景歌　近江八景は近江国琵琶湖南部の八つの景勝。明応九年（一五〇〇）、中国の「瀟湘八景」に擬した近衛政家の選定と伝えられる。三井の晩鐘、唐崎の夜雨、堅田の落雁、粟津の晴嵐、矢橋の帰帆、比良の暮雪、石山の秋月、瀬田の夕照をいう。『近江八景歌』は近江八景のそれぞれを歌に詠んだもので、単独でも版行され（『往来物大系』六十一所収の正徳頃刊のもの等）、節用集の類にもよく掲載されている。たとえば『文翰節用通宝蔵』（明和七刊、『節用集大系』三十七所収）にも近江八景歌が出ている。そこに堅田落雁の歌は「峯あまたこえてこしちにまつちかきかたゞになびきおつ

るかりがね」とある。また、戯註の趣向に合わせて、「落つる」を人名の「お鶴」ともじっている。

・**名頭文字**　「武部源蔵門人　涎繰文庫」の蔵書として出る。涎繰は『菅原伝授手習鑑』寺子屋の段で、源蔵の寺子屋の門弟として登場する。『名頭文字』は寺子屋などで、源・平・藤・橘・菅などのように、有名な姓氏の頭字を列記して、読み書きの教材にしたものであり、それで涎繰の文庫にあるとしたものであろう。節用や雑書類に「名頭文字」として見えるが、単独でも版行されている。たとえば『往来物大系』十八所収の『名頭国尽』（江戸後期、藤岡屋慶次郎板）。それらには各文字が引用の通りではなくバラバラに掲載されている。

・**画本八十宇治川**　国書総目録では国会図書館に一本のみ登録されているが、国会本は寛政二年刊の内容的に全く別の本である。京都大学図書館に『絵本武術一覧』という外題をもち、大田南畝の序がある狂歌絵本が所蔵されている。武者絵に狂歌を賛する形式のもので、刊記によれば天明六年蔦屋重三郎刊。京伝の画の師であった北尾重政画。序題に『絵本八十宇治川』とある。その中に「鎌倉将軍頼朝」として源頼朝が鶴を放生する画があり「よりともゝ存する子細ありつるが鶴が岡にてつるはなしつる　尻焼猿人」の狂歌がある。猿人は尻焼猿人。酒井抱一の狂名。京伝妹の黒鳶式部の主催した「手拭合」の会（天明四年）にも名を連ね、京伝作洒落本『客衆肝照子』（天明六刊）に序文を書いている。天明五年刊『狂歌俳優風』にも「尻焼猿人狂」として載るので、「卿」を常に「狂」ともじっていたのであろう。なお、『画本八十宇治川』の義経と静御前の画に「烏羽玉の闇にきらめく小薙刀しづかは敵ををふて搦手　山東京伝」と、京伝も賛を寄せている。

・**荘子**　天運篇第十四に「夫鵠不日浴而白、烏不日黔而黒」とある。京伝の洒落本『傾城觿』（天明八刊）の「丁字屋雛鶴」の項にも同所の引用がある。『荘子』が近世文学に与えた影響は大きく、京伝ももちろん例外ではない。たとえば黄表紙『孔子縞于時藍染』（寛政元刊）・洒落本『傾城買四十八手』（同二刊）・黄表紙『百化鳥準擬本草』（同十刊）等。

みなの川〇葛西はみな野と川ばかりの所（**ハツ五ウ**）」おほし。姉の峯がつく羽子は川へ落ち妹のおつるが羽子野へ落ちけるが、お峯ははしたなく川へ落ちし羽子を裾からげてとりあげて来る。おつるは野へ落ちし羽子をゑしやくしてとりえず、そのまゝすてゝをく。此様子を地頭何がしどの通りかゝり見給ひ、おつるが気性をせうびし給ひ、妾にかゝへ給ふ。

・**ゑしゃくする**　遠慮する。さしひかえる。「……トとはれてしばしゑしやくせしが」（『契情買虎之巻』田にし金魚、安永七）。

・**地頭**　江戸時代、地方（じかた）知行（将軍または大名から与えられた一定地域の領主権）を持つ幕府の旗本、私藩の給人（きゅうにん）の通称。小領

主。また一地域の領主の俗称。『浮世物語』七、鳫（がん）鴨（かも）の稲（いね）を喰（くら）ふ難儀の事「さる程に百姓共はこの鳫を代官の如く、地頭の如く恐（おそろ）しがりて」。

こいぞつもりて○孫右衛門には一家中の肥をとるやうにと仰せ付られ、お屋敷中の肥をたゞとりて葛西中の百姓へうり、その代がつもり〳〵て今は大金持となる。みな娘のかげ也。

（頭註　**ハツ六オ**）

男女一代八卦　十二運繰りやうの所の歌二

養ひの母につれたる鶴の子が千代をかけたる故郷のもと

（頭註　**ハツ六ウ**）

和漢朗詠集　鶴帰二旧里一

おつるが錦を着てふるさとへ帰りし事をつくれり　丁令威が古事也

相鶴経二曰　鶴陽鳥也因二金気一

おつるはとかく金に縁のある生れつき也

花扇書待乳山碑銘　名月やこがねの鶴を待乳山　五町

・**一家中**　武家社会において、家来一同。

・**こい**　「こえ（肥）」の変化した語。「新吉原では糞（こひ）をとるとはいはず、恋をとるといふ言葉に通ふを忌みて、糞をあぐるといふもおかし」（随筆『金曾木』文化六頃）。当時糞尿は、肥料とするため近郊農民が高値で買い取った。『守貞謾稿』（喜田川守貞、嘉永六頃成）巻四に「家主株は陽に金をもつてこれを譲る。しかるといへども地主の意に応ぜず、あるひは好曲および地代・店賃等を多く債する時は、地主より追放することあり。株金は大略二十両三十両より一、二百両に至る。地主よりの給金と余得とに応じて売買に差あり。大略百両の株の年給二十両・余得十両・糞代十両、おほむねおよそ三、四十両を得る。けだしかくのごときの株金、昔は賤しく年々やうやくに貴（たか）し。因みに云ふ、江戸は尿は専ら溝渠（こうこう）にこれを棄て、屎（し）は厠（かわや）にこれを蓄ふ。屎、俗に「こゑ」と云ふ。こやしの略なり。屎価、こゑ代と云ひ、屎代は家主の有とし、得意の農夫にこれを売る。稀に尿を蓄ふ者あり。皆代家主に収む。京師は尿は借屋人の有として野菜と代ふる。大坂は屎代は家主、江戸に云ふ地主の有とし、尿は借屋人の有とし、得意農にこれを与へて、冬月綿と蕪葉（かぶらな）とをもつてこれに易へんとす。屎価、大略十口の屎一年金二、三分なり。農地に近き所貴価なり。」とある。

・**男女一代八卦**　男女の相性を占うためのものである。雑書類にも出るし、多少違う書名の場合もあるが単独に版行されたものもある。京伝の『御存商売物』では妹の柱隠しを誘拐された青本が、その居場所を『男女一代八卦』を呼んで占わせる。「十二運」は、中国の九星で、十二年で一巡する運勢のこと。胎・養・長・沐・官・臨・帝・衰・病・死・墓・絶をいう。該当歌は、『宝暦大雑書万々歳』（江戸時代女性文庫9所収、但し安政二年再刻）「十二運の事」の「養」の項に「やしなひのはゝにつれたるつるの子かちよをかけたるふるさとのもと」とあり、また刊年不明であるが『昼夜懐要両面重宝記　再刻』にも「十二運吉凶を知事」として見える。

・**和漢朗詠集**　『和漢朗詠集』は江戸時代にはたびたび版行され、本作に近いところでは天明二年刊行のものがある。また、節用集類にも引用されていることがある。『和漢朗詠集』巻下「鶴」に、「鶴帰二旧里一　丁令威之詞可レ聴ツ。龍迎二新儀一　陶安公之駕在レ眼ニ」（出典、『本朝文粋』巻三「神仙策　都良香」）。『捜神後記』上に、丁令威が鶴に化して郷里の城門華表の柱にとまったとあるにもとづく。

・**相鶴経**　「相鶴経」は『圓機活法』鶴之部に載るのが有名であるが、京伝はそれを直接見たのではなく、『書言字考節用集』に載る表現を採ったものであろう。「丹頂鶴」の項に「『相鶴経』鶴　陽　鳥。因　金　気」とある。『圓機活法』ではもう少し複雑な表現となっている。

・**花扇書待乳山碑銘**　向井信夫氏「花扇名跡歴代抄」（『江戸文芸叢話』平成七・八木書店所収）によれば、吉原の男芸者大坂屋五調（町）の「月照やこがね波よる真乳山」の句を天明元年に吉原扇屋の遊女二代目花扇が碑とするために書いたという。

・**待乳山**　浅草の本竜院(浅草寺末寺)の境内にある小丘。丘上に本竜院の本堂待乳山聖天宮があり、俗に聖天山という。また、丘上には戸田茂睡の「あはれとは夕越えて行く人も見よまつちの山にのこすことの葉」を刻んだ碑が立っている。

ふちとなりぬる○そのうへおつるは御代つぎを（**ハツ六オ**）やどしければ、その御祝儀とて孫右衛門に五十人扶持くだされける。されば扶持となりぬるとはよめり。（**ハツ六ウ**）」

（後註　**ハツ六ウ**）

児女唱唄二曰　おつるが香箱あけてみよ、なかよし子よしほつ〳〵ほらのけ

此歌も葛西にてうたひ出しなるべし

江戸砂子

根本は麓の鶴屋うみぬらん米まんぢうは玉子なりけり

東海道中双六二曰　鶴みのまんぢう神奈川の名物とアリ

此おつるがのがれぬ中なるべし

・**扶持**　近世武家の俸禄の一種。主として下級の武士に与えられるものだが、出入りの御用達商人たちが扶持俸禄を受けることもあった。一日五合の支給が一人扶持で、時には金子で与えた。

・**児女唱**　特定の書名ではない。大正四年刊の『俚謡集拾遺』（高野辰之・大竹紫葉編）の「東京府　童謡　手鞠唄」の項、「おん正〳〵お正月」で始まる唄に「女房は亀屋のお鶴殿、お鶴の針箱開けて見たれば雌鳥雄鳥仲好し小好し、ホヽほ螺の貝、ヒツヒヒラノ貝」とある。この歌中には、京伝が黄表紙『無匂線香』・『花芳野犬斑』（寛政二刊）などにおいても、もじる等、利用をした歌詞があり、これに類する手鞠唄があったことは確実であろう。

・**江戸砂子**　地誌、菊岡沾涼著、享保十七刊。巻之二中に

「聖天宮　金龍山　本龍院。天台、浅草寺末。待乳山、又真土山、聖天山とも云。（中略）米まんぢう、当所の名物。根本鶴屋。

　根本はふもとの鶴屋産（うみ）ぬらん米まんぢうは玉子なりけり」。

とある。安永九刊の京伝黄表紙『米饅頭始』はこの歌を趣向とする。また、後年黄表紙『江戸砂子娘敵討』（文化元刊）を書いている。「米まんじゅう」は、金龍山の「ふもとや」「鶴屋」、武蔵国川崎宿の川崎大師のそばの茶屋「万年屋」などの名物。名前の由来は、「よね」という女が作ったとか、皮を米で作ったからなどの説がある。京伝自身『骨董集』（考証随筆、文化一〇成）で『紫の一本』（地誌、天和三）、『江戸鹿子』（地誌、貞享四）を引くなどして詳しい考証を試みており、そこでは「よね」が作ったという説を否定している。

・**東海道中双六**　『御存商売物』最終丁には表を商人が「一枚絵、草双紙、宝船、道中双六」と売り歩く声がする様子が記される。正月の販売物であった。鶴見は宿駅ではなく川崎と神奈川の間の立場で、当時の双六の神奈川宿に鶴見の饅頭を記載したものがあったのだろうと推察される。ただし今のところ該当する記載を持つ双六は未見。都立中央図書館東京誌料所蔵の「東海道五十三次新板道中すご六」（刊年不明、上州屋重蔵版）の神奈川の部分には、「つるみ」という文字があり、おそらくはその名物に触れていると見られるが、刷りが悪く、その他の文字が欠落している。なお、京伝作黄表紙『新板替道中双六』（寛政五刊）では川崎の項に鶴見の饅頭が見える。

④　在原業平

（ありはらなりひらあつそん）
在原業平朝臣

本院左大臣　（ときひら）時平　基経男

（きんぴら）金平　坂田

シヘイ

（かはごえひら）川越平　川越産
コイツハ人ノ名デハナカツタハカマニスルモノダヲキヤアガレ

（さねひら）実平　土肥二郎
仕ユニ鎌倉殿ニ

（かねひら）兼平　今井四郎
仕ユニ木曾殿ニ

（おほひら）大平　一名シツポコト云
又コイツモバンクルワセダ

業平（ハツ七オ）

ハツ七オ　ハツ七ウ　ハツ八オ　ハツ八ウ

・**時平**　藤原時平（八七一～九〇九）。平安時代初期の公卿。「シヘイ」は浄瑠璃読み。菅原道真を大宰府に左遷したゆえに、芝居では悪役となる。

・**基経**　藤原基経（八三六～八九一）。時平は基経の長子。謡曲『雲林院』では、在原業平の霊が業平と二条の后の恋物語、基経の霊が妹二条の后に対する兄弟愛的執着という、『伊勢物語』の秘事を語る。

・**川越平**　武州川越地方から産出する絹の袴地。洒落本『当世風俗通』（安永二）極上の息子風に「夏は袴せいかう平の小棒すしまたは。河越平。極上品ニいちつてはあやひら。などよし」。

・**おきやがれ**　よしにしろ。よしゃあがれ。

・**実平**　土肥実平。源頼朝挙兵以来の臣。相模土肥次郎と称す。

・**兼平**　今井兼平。信濃権守中原兼遠の子、今井四郎と称す。木曾四天王の一人。義仲とは乳兄弟。義仲挙兵の時より、その謀将となる。

・**大平**　平たく大きな蓋付きの椀。また、それに一つ盛りにして出す料理。

・**しっぽこ**［卓袱］　「しっぽく」とも。種々の大きな器に料理を盛って卓袱台の上におき、各人が取り分けて食べるという、食べ方が中国風の料理。

ちはやふる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くゞるとは

此歌はあまねく人しる所なれども、その過ちを正し口伝をしるす

ちはやふる〇ちはやといふ女郎ありけるが、ある角力取その女郎をあげて遊びけるに、此女郎よく客をふるくせありて、かの角力取をその夜さんぐふりける

（頭註　**ハツ七ウ**）

ちはやふる

道外百人一首　業平の歌

ちはやふる紙屑買ひに炭団売り　下ノ句略

毒虫去ル歌　ちはやふるかみくずかひにたどんうり

・道外百人一首　享保年間の近藤清春画の百人一首の各歌をもじった書。天明四年版加賀文庫蔵本四・オに

「ありはらのなり平あそん
　ちはやふるかみくずかひにたどんうりからくりみせて水あめをやる」。

・毒虫去ル歌　潅仏会（釈迦誕生の日）の卯月八日（陰暦四月八日）に甘茶で墨をすり、「ちはやふる卯月八日は吉日よ紙下（さげ）虫を成敗ぞする」の歌を紙に書いて逆さまに便所に張ると、毒虫が上がってこないという俗信があった。天明三刊の『狂文宝合記』「和歌筋夢中之伝」に「毒虫をはらふ歌」として天地を逆に「ちはや振卯月八日は吉日よかみさげむしをせいばいぞする」とある。また、『江戸生艶気樺焼』の画面中の吉原の遊女屋の雪隠にもこの札が描かれている。

神代もきかず○かの角力取は、ちはやにふられてさみしく一人寝してゐるゆへ（**ハツ七ウ**）」、妹女郎の神代といふをくどひてみたれど、神代も聞入れぬなり

龍田川○かの角力取の名を龍田川といふ。その後角力取をやめ、豆腐屋をはじめ渡世をいたしける

（頭註　**ハツ八オ**）

龍田川

古今和歌集序　秋の夕べ龍田川に流るゝ紅葉は、帝の御目には錦と見給ひ

嵐雪玄峯集　角力取り並ぶや秋の唐錦

・古今集序　近世の版本はしばしば出されているし、序だけでも安永七年以降版行されている。京伝作品では黄表紙『客人女郎』（天明三刊）等に引かれる。序のこの部分で指しているのは二八三番の次の歌。

「　　題しらず　　よみ人しらず
　龍田河紅葉乱れてながるめりわたらば錦中やたえなむ
　　このうたはある人、ならのみかどの御歌也となむ」。

・玄峯集　寛延三年刊。百万坊旨原が編纂した服部嵐雪の発句集。嵐雪の別号玄峯堂から取った名称。秋之部・相撲として「角力とり並ぶや秋のから錦」とある。山本亀成『続百化鳥』中に「すもふ鳥」という項目が立てられ、「ある人の句に」として、「すもふとりならぶや秋の唐にしき」と所引。

からくれなゐに○ちはやはあまり客をふりくして、年あけの時分も世話にならふといふ客もなく、ついに紙屑買ひの女房となり、こゝにもゐとけず、又炭団売りの女房となり、今はその日をくらしかね、朝夕の食事にもかて飯を食ふやうな事にて、龍田川が内ともしらずかの豆腐屋へ、豆腐のからを（**ハツハオ**）」もらひに行しが、龍田川は昔の意趣があるゆへ、からをくれぬ也。

その心をからくれないとは詠めり

（頭註　**ハツハウ**）

からくれなゐ

当流小謡　山姥ニ曰　柳はみどり花はくれなゐ

・**かてめし**　米が足りない時、米に麦、大根、豆類などを混ぜてたいた飯。

・**いしゅ**　人を恨む心。

・**当流小謡**　謡曲の中でも有名な一節を抜き出して便宜に供したものであり、『当流小謡』のほか『当流小うたひ大成』（元禄八刊）『当流小謡梁塵集』（観世左近編、明和元刊）等の名で単独で版行されたり、節用集等に収録されていた。ここでは謡曲『山姥』「仏あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳はみどり、花は紅の色々」を採っている。京伝作品では『奇妙図彙』（享和三刊）・『本朝酔菩提全伝』（文化六刊）・『重井筒娘千代能』（文化十刊）・『石枕春宵抄』（文化十三刊）等にこの詞章を使用している。

・**柳はみどり花はくれなゐ**　蘇軾の詩の「柳緑花紅真面目」により、柳は緑色をなし、花は紅に咲くように、春の景色の美しいこと。また、ものにはそれぞれの自然の理が備わっていることのたとえで、禅宗で、悟りの心境をいい表す句。

水くゞる○ちはやは、しよせんかつゐて死なんよりは、いつそ身を投げんとからす川へ身を投げける。その心を水くゞるとよめり

（頭註　**ハツハウ**）

水くゞる

てまり唄ニ曰　いはれたが面目なひとてからす川へ身をなげて、身は沈む、髪は浮きる、そこで女子の御心と云々

・**かつえる**　飢える。空腹になる。

・**からす川**　群馬県南西部を流れる川。利根川の支流。

・**てまり唄**　特定の書名ではない。前出『俚謡集拾遺』の「東京府　俚謡　麦

打唄」中、「鎌倉へ参る道」で始まる唄に「あやのかけ苧を忘れた、忘れたが、面目ないとて、烏川へ身を投げた。身は沈み髪は浮き候よ」とある。また同じく「東京府　童謡　手鞠唄」の「向ふ身しヤい」で始まる唄に「彼方で打たれて此方で打たれて、烏川へ身を投げた、身は沈む。髪は浮きやる、そこで取るものは御心」とある等、明治期まで類歌が伝承されていたことが確認できる。

・**めぼく**　めんぼく［面目］。

とは○とはトハちはやが幼名なり（**ハツハウ**）」

（頭註　**ハツハウ**）

伊達競阿国戯場＝此歌の心をつくれり

角力とりをきぬ川とし、龍田川といふ名の縁によりて、ちはやを高尾にとりくみ、豆腐屋を南禅寺豆腐にとりくみ、妹女郎の神代を累にやつし、高尾を入水の体にもてなす所まで、みな此歌の様也

・**おさな名**　幼いときの名の意味だが、遊女の場合は本名となる。

・**伊達競阿国戯場**　歌舞伎脚本。初世桜田治助・笠縫専助合作。安永七年江戸中村座初演。伊達騒動と累の解脱物語をあわせて脚色したもの。京伝は治助と親しく、この狂言も当然深く知悉していたであろう。ここでは原文を引用するのではなく、その趣向をこじつけている。

※本こじつけ解釈は、本書以前の『百人一首虚講釈』（安永四刊）と『鳥の町』講釈の段（風来山人序、安永五刊、堀野屋板）に既にある。その二書の解釈を語句ごとに比較すると、次の通りである。

「ちはやふる」

『虚講釈』女郎ちはやが、通ってくる業平を振り続けた。

『鳥の町』女郎ちはやが、通ってくる角力取を振り続けた。

「かみよもきかず」

『虚講釈』末社の紙屋与兵衛（紙与）に頼んで言い聞かせたが、それでも承知しない。

『鳥の町』角力取は妹女郎の神代にとりもちを頼んだが、それでも聞き入れない。

「龍田川」

『虚講釈』業平は真崎で豆腐屋を始め、焼いて田楽にして売ったりもした店の名が龍田川。

『鳥の町』角力取の名が龍田川で、その後豆腐屋になった。

「からくれないに」

『虚講釈』ちはやはその後乞食になり、おからをもらいに業平の店にもくるが、ことわられる。

『鳥の町』業平を龍田川とする以外、同じ。

「水くくる」
『虚講釈』ちはやは世をはかなんで身投げする。
『鳥の町』同じ
「とは」
『虚講釈』ちはやのおさな名。
『鳥の町』同じ

以上を見ると、本書は『鳥の町』を基として、頭註に引いた『道外百人一首』の「かみくずかいにたどんうり」を加えたと考えられる。なお、落語の「千早振る」は『鳥の町』に同じ。また、『百人一首虚講釈』の戯注末には、「右此一首の戯注ハ一トむかし先キの夜話に予弘メ置たり」とある。

⑤　伊勢

伊勢（いせ）

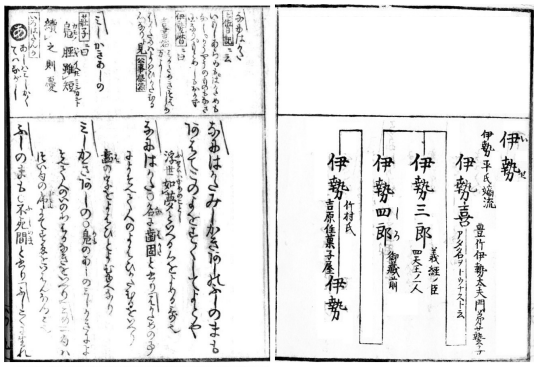
伊勢平氏嫡流　伊勢喜　豊竹伊勢太夫門弟芸子　アダ名ヲトウナスト云

伊勢三郎　義経ノ臣　四天王ノ一人

伊勢四郎（しろ）　御蔵前

伊勢　竹村氏　吉原住菓子屋

伊勢（ハツ九オ）」



ハツ九オ

ハツ十オ

ハツ九ウ

ハツ十ウ

・**伊勢**　平安中期の歌人。三十六歌仙の一。伊勢守藤原継蔭の女(むすめ)。

・**伊勢平氏**　桓武平氏のうち高望王の曾孫維衡の頃から伊勢・伊賀地方に所領をもち、この地方を基盤にした一族。五代目忠盛に至り中央官界に進出。その子清盛が政権を取って栄華を極めたが、文治元年（一一八五）源氏により壇の浦で滅亡。

・**伊勢喜**　未詳。

・**豊竹伊勢太夫**　『声曲類纂』の「豊竹座浄瑠璃外題」中、「天智天皇苅穂菴」（宝暦四年十二月）に「当冬いせ太夫江戸よりかえり新太夫と改」などと、「伊勢太夫」の名は見えるが、この人物のことか、不明。

・**芸子**　音曲・歌舞などで酒席をとりもつ女。女芸者。深川で男芸者のことを太夫という。その縁で、「伊勢太夫」から女芸者へ連想を働かせたもの。「芸子（ゲイコ）　女芸者をいふ」（『浪花方言』）。

・**トウナス**　不美人の女をののしって言う語。

・**伊勢三郎**　鎌倉時代の武人、伊勢三郎義盛。出生等、未詳。参謀格として源義経に仕えた。俗に義経四天王の一人。

・**伊勢四郎**　蔵前の札差伊勢屋四郎左衛門。十八大通の一人。「蔵前者」は、浅草蔵前の札差仲間の称。「世に蔵前者といへば一流立て、往古十八大通抔とて浪花に云堂島そだち抔の類にして侠客有」（『伝奇作書拾遺』上）。「まじめなかたい伊勢屋四郎左衛門は、人のかゝい者に成りたる兵庫屋の月岡を、十四五年立てもと買馴染の女郎故、思ひ残りてしうしんふかく、はげの月岡を引取てめかけにせしも、古今稀れ成る事なり」（『十八大通』三升屋二三治）。

・**伊勢　竹村氏**　竹村伊勢大掾の略。吉原仲之町にあった菓子屋。巻煎餅・最中が有名。「よい中の町の夕景色、左リの竹村に比して、右側の七けん軒をなぶ」（山東京伝『通言総籬』天明七年刊）。

なにはがたみじかきあしのふしのまもあはでこのよをすぐしてよとや

浮世如レ夢（ふせいはゆめのごとし）といへる心をよめる歌也

・**ふせい**［浮生・浮世］　はかない人生。定まりのない人の世。李白「春夜宴二桃李園一序」に「浮生若夢」とある。「文に曰く、浮生（ふせい）は夢の如し。歓（よろこび）をなす事（こと）いくばくぞやと。誠にしかり」（『金々先生栄花夢』序、恋川春町画作、安永四年）「されば、天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮生は夢［まぼろし］といふ」（『日本永代蔵』一ノ二）。これをこじつけ解釈の趣向としたのは、「蘆（アシ）」と『枕中記』（後出）主人公「盧生（ロセイ）」の字形の類似性及び同音であることからの思いつきか。

なにはがた○名（な）に歯固（はがた）と書り。歯固（はがた）めの事によそへて人の齢（よはひ）かたむるをいへり。歯（は）の字をよはひと読（よ）む故（ゆへ）なり

（頭註　**ハツ九ウ**）

なにはがた

土佐日記云　芋茎（いもじ）・荒布（あらめ）も。歯固（はがた）めもなし。かうやうのものもなき国なり。もとめしもおかず。

伊勢暦曰　吉書始　歯固（はがた）め着衣始（きそはじ）め万よし

歯固めは齢かたむる心なり ト見 公事根源

・**難波潟**　歌枕。いまの大阪湾旧淀川の河口あたり。航路を示す「澪標（みをつくし）」が立てられ、あたり一面に「葦（あし）」が生い茂っていたため、歌では、「澪標」「葦」などが景物として詠まれる。

・**はがため**［歯固］　正月の三が日に、鏡餅・大根・瓜・猪肉・鹿肉・押鮎などを食べて長寿を願う行事。歯（齢）を固めることから、寿命を延ばす意がこめられている。

・**よそへて**　かこつけて。

・**土佐日記**　『土佐日記』承平五年一月一日の条に見える記述。宝永四年版本では「いもじあらめもはがためもなし。かうやうの物もなき国なりもとめしもおかず」とある。国とは、船のことを戯れて大袈裟に言ったもの。「いもじ」は芋の茎（ずいき）を干したもの。「あらめ」は、コンブ科の黒褐色の海藻。

・**伊勢暦**　伊勢神宮が全国に配った暦。折本の体裁。神宮暦。この年代に近いものは未見であるが、文化四年丁卯のものを見ると、「はかため（歯固）くらひらき（蔵開）ひめはしめ（姫始）きそはじめ（着衣初始）ゆとのはしめ（湯殿始）こしのりそめ（輿乗り初）万よし」とある。「アゝつがもなき梅暦の評判は、伊勢こよみのこまかに穿りて」（『春色梅児誉美』三）、「只今伊勢ごよみを見て春のちかづくをわきまへ」（『世間胸算用』四ノ四）。

・**吉書始**　正月の書初めに吉として暦に記されている日。「日あたりもよき梅の枝を、月曜星の尊前に供、一陽来福の吉書はじめ」（『春色梅児誉美』序）。

・**きそはじめ**　江戸時代、正月三が日のうち吉日を選んで、新しい着物を着始めること。また、その儀式。「天皇玉女の神徳に、恵方の買手来そはじめ」（『春色梅児誉美』序）「季吟曰、衣を着初め祝なり、三が日の内吉日をえらぶ」（『栞草』序）「その春駒に乗初の、仕合よしや木曾始」（『道中粋語録』安永末、山手馬鹿人）。

・**公事根源**　『公事根源』朝廷における年中行事の起源・沿革を、一月より十二月まで順次説明した有職故実の書。一巻。一四二三年（応永三〇）ごろ成立。著書は一条兼良とされる。一月の項には「歯固」についての言及はあるが、このような表現はない。『書言事考節用集』の「歯固」の項に引書として本書を掲げている（ただし引用文の表現はなし）。この表現は京伝の独自のものであり、引書を『書言字考』によってもっともらしく掲げたものであろう。『書言事考節用集』の「歯固」の項に「年始ニ所言。見『江次第』『公事根源』」とある。

みじかきあしの○鳧のあしの短きによそへて、人の命はかなきをいへり。この二句は対句の序にて、末をいはん発語也

（頭註　**ハツ九ウ**）

みじかきあしの

荘子 三曰　鳧（カモノ）脛（ハギ）雖（イヘドモ）レ短（ミジカシト）続レ之即憂

いろはたんか

あ　足は短く手は長し

（頭註　ハツ十オ）

かぶと軍記琴責めの段

鳧の足短しといへど、これを継がば悲しみなん。鶴の嘴長しといへど、これを断たば憂ひなん。

又云

野暮のはけ短しといへど、これを継がば憂ひなん。通のはをり長しといへど、これを断たば悲しみなん。

・**ほつご**　語調を整えたり、ある意味を添えたりするために語の初めに用いられる言葉。もともとの歌意でも「難波潟短き蘆の」は「ふし」を導く序詞である。

・**荘子**　『荘子』は「③陽成院」参照。「鳧脛雖短続之即憂」は駢母編にある表現。「鶴ノ脛ハ雖レ長シト断レバ之ヲ即チ悲シム」と続く。京伝は『小紋雅話』（寛政二刊）・『初役金烏帽子魚』（寛政六刊）・『五人切西瓜斬売』（享和四刊）でも、この詞章をもじっている。「風呂は鳧の脚短といへども膝をこゆる事なく」（『東海道中膝栗毛』二ノ上）。

・**いろは短歌**　「いろは」四十七文字と「京」の字の一字ずつを頭に置いて詠んだ教訓的な歌や諺（ことわざ）。近藤清春画の黒本などが知られる。そこに同じ表現がある。『御存商売物』（天明二刊）でも擬人化されて登場。「黒本は三人をたのみ、まんまと柱かくしをぬすみしだし、うちへつれてきたりしに、女房いろはたんか、何のわけもしらず、大のやきもちやきにて、夫婦げんくわをはじめ、おさだまりのすりこ木でたゝきおふ」。

・**壇浦兜軍記**　人形浄瑠璃。文耕堂・長谷川千四作。享保十七年九月竹本座で初演。第三段に「鳧の脛短しといへども之を続がば憂へなん、鶴の脛長シト雖も之を断たば悲しみなん、民を制する事此理に等し」（前出『荘子』を引いた台詞）。「琴責」は、『壇浦兜軍記』三段目初めの部分の通称。畠山通忠が阿古屋が景清のゆくえを知らないことを知る。

・**又云**　以下は前註をもじった京伝の創作か。

・**はけ**［捌］　男の髷の先端。髻（もとどり）の先。「髪がとんだやぼだ、どふぞもう五分ほど根をあげて、はけさきをすつとひつこきとしたい」（洒落本『遊子方言』明和七刊）。

・**はをり**　安永・天明当時、着物より丈の長い羽織が通人の間に流行した。「焼きのまわつた長羽織は、二ばん目の子のひよ〳〵になります」（洒落本『無頼通説法』安永八刊）「男も羽織などの長すぎたらんはいと見ぐるしけれ」（随筆『独寝』上ノ三二）。

ふしのまも〇不死間と書り。不死国に生れ（**ハツ九ウ**）」たる身なら

ねば、何事もしなざる間につとめよ、油断するなと、御親父のいひそふなお談義也。

（頭註　**ハツ十オ**）

ふしのまも

不老不死国ノ事ハ　詳和荘兵衛ニ也

三才図会ニ曰　不死国

人色黒シ而不レ死セ　樹（ジユ）有リ食ハレ之ヲ　寿（イノチナガシ）　泉有リ飲（ノメバ）レ之ヲ

不レ老セ

・**ごしんぷ**［御親父］　他人の父を敬っていう語。お父上。

・**だんぎ**［談義］　意見をすること。説教。

・**和荘兵衛**　遊谷子作の読本。安永三・八刊。書中に不老不死国についての詳細な記述がある。「聞きも及ばん此国は不老不死国（ふらうふしこく）なり。中華（ちうくわ）の境（さかへ）を去事（さること）海上凡そ五六万里（中略）扨（さて）此国の風俗（ふうぞく）を見るに。人に死（しぬ）ることなければ産（うま）るゝこともなし。千年二千年の内にたまゝ一人死（しぬ）ことがあれば其かわりの人又独り生る。されども是は幾万（いくまん）の中に一人もまれなることにて。皆（みな）歳（とし）のころ四十ばかりの顔色（がんしよく）。男女とも病（やまひ）といふうれひもなく。四季とも雨風（あめかぜ）序（つひで）よく。五穀（ごこく）よく実（み）のりゆたかなる国なり。日本の牛馬（うしうま）のごとく家々に大なる鶴（つる）を飼（かふ）て耕作（かふさく）のたすけとなし。往来する時はこの鶴（つる）いろゝゝの装束（しやうぞく）して。其背中（せなか）に乗（のり）て飛（とび）あるくことなり（下略）」。京伝に黄表紙『和荘兵衛後日話』（寛政九刊）がある。

・**三才図会**　中国、明代の図解書。文・地理・人物・鳥獣・草木など一四部門に分けて種々の事物を図説する。『和漢三才図会』はこれに日本の事物を加えたもの。京伝は、『三才図会』を直接見ていたのではなく、『和漢三才図会』等からの孫引きではないかと思われる。『和漢三才図会』に『三才図会』を引いて、「不死国〈在二穿胸国ノ東一〉其人黒色長寿ニメ不レ死セ居二園丘ノ上一有二不死樹一食レ之寿シ有リ二赤泉一飯レ之不レ老」とある。たとえば後年になるが合巻『累井筒紅葉打舗』（文化六刊）に「鰐魚図」として『和名抄』『三才図会』を引いているが、これは明らかに『和漢三才図会』からの孫引きである。

あはでこのよを○粟飯（あはいゝ）かしぐうちの夢（ゆめ）の此世なればと、又くどく言（い）ふたもの也

すぐしてよとや○うかくとすぐしてゐよふとは、悪（わる）ひ心がけじや

と、いらぬ世話をやいてよめり（ハツ十オ）」

（頭註　ハツ十ウ）

あはで比よをすぐしてよとや

矢根五郎せりふニ曰　砥石をぬぐひ無造作に、これ邯鄲の枕

ぞと、ふんぞりかへつて時宗は　下略

ヲランダ本草

DO ド
DO ド
N ネ
ÆU ウ
S ス
ニ
曰

アワノモチモ
AWANOMOTI MO

イヤイヤ　ソバキリ
IJAIJA　ZOBΛKIRI

ソヲメンクイタイ
ZOOMEN KOEITAI

ナ
NA

ヒダリヨリヨムベシ

（後註　ハツ十ウ）

異聞集ニ曰

呂翁盧生取ニ一ノ枕〔一〕授レ之　中略

寤レ夢而黄粱未レ熟　又見枕中記ニ

謡曲邯鄲ニ曰　さて夢のまは粟飯の　下略

又考ニ画双紙金々先生栄花夢ヲ侍ルカ

又一説に水の泡で此世をといへる心なりと云

引書あり。又かんがふべきこと也

維摩経　方便品ニ曰

是身如泡不得久立云々

このみはあはのごとくひさしふこのことをえず

・**かしぐ**［炊］　米麦・粟等を煮たり蒸したりして飯にする。飯をたく。炊事する。

・**矢の根**　享保十四年江戸中村座で「扇恵方曽我（すえひろがりえほうそが）」の中の一場面として二世市川団十郎が初演。曽我五郎が矢の根を研いだ後うたたねし、夢の中で兄十郎が和田の酒盛で危難にあっていることを知り、それを救いに工藤の館へ向かうという内容。「砥石を拭ひ無雑作に、是れ邯鄲の枕ぞと、ふんぞり返って時致は、ヤツトコトツチヤアウントコナ暫しまどろむ高鼻鼾、ゆたかにこそは臥しにけれ」。

・**時むね**　曽我の五郎時致。「五郎がせりふに、宝の山とはいはず、『貧乏の山へいりながら、手をむなしく帰るが口惜しいわい』といへば、見物その気どりをほむる」（『孔子縞于時藍染』京伝作画、寛政元年）。

・**ドドネウス**　当時の俗謡「粟の餅もいーやいや、米の餅もいーやいや、蕎麦切素麺くいたいな」（平凡社東洋文庫『日本児童遊戯集』所収「どうどうめぐり」による）をオランダ語風にラテン文字表記したものである。ただし京伝にはラテン文字の知識はなかったと思われる。周辺で蘭学に堪能な人物に相談して書いてもらったのではないか。それは万象亭森島中良ではなかっただろうかと推測する。なお、寛政六年刊行の鶴屋喜右衛門板の黄表紙の絵題簽の意匠にこれが使われている。この年は万象亭が鶴屋からひさびさに黄表紙を出した年であり（異論もあるが）、その意匠はそのことと関連があるとも思える。「ドドネウス」はベルギー生れの植物学者の名であるが、ここではその著書『Cruydt-Boeck』（植物誌・草木誌の意）を指している。この本は万治二年（一六五九）に幕府へ献上された後知られるようになり、野呂元丈により寛保二年（一七四二）～寛延三（一七五〇）にかけて『阿蘭陀本草和解』として和訳され広まった。平賀源内も原著を入手しており、源内所蔵の蘭書目録『物産書目』に「紅毛本草　壱帖　ドドネウス著」とある（城福勇『平賀源内の研究』昭和五一）。

・**異聞集**　唐の伝奇集であるが完本としては伝わらず、『太平広記』ほかに引かれて伝わる。

一方『枕中記』は「邯鄲一炊の夢」を題材にした中国唐代の伝奇小説。『太平広記』八十二に収められる。「呂翁」と題して「開元十九年、道者呂翁経邯鄲道上邸舎中、設榻施席、擔囊而坐、俄有邑中少年盧生」「是時主人蒸黄粱為饌、翁之探囊中枕、以授之」「盧生欠伸而寤」「主人蒸　黄粱尚未熟」「蹶然而興曰。豈其夢寐耶、翁笑謂曰、人生之大事亦猶　是　矣」というものであり、文末割注で「出異聞集」とある（ただし『枕中記』の書名は『太平広記』のこの箇所にはない）。なお『和漢三才図会』には「枕中記云」として、「呂翁経二邯鄲一有レ二盧生一俱ニ言フ二世事ノ困厄ヲ一主人方ニ蒸レ粱ヲ取ニ嚢ノ中ノ枕ヲ一以テ授レ之ニ」「盧生欠シ伸シテ而寤メタリ呂翁在レ傍ニ黄ノ粱尚ヲ未レ熟」とある。

・**謡曲邯鄲**　『邯鄲』は、前項と同じく「邯鄲一炊の夢」を題材にした謡曲。「栄花のほどは五十年さて夢の間は粟飯の一炊の間なり」とある。

・**金々先生栄花夢**　恋川春町の黄表紙『金々先生栄花夢』（安永四刊）である。全体の趣向を邯鄲の故事に拠っており、「金々先生の一生の栄花も邯鄲のまくらの夢もともに粟粒一すひの如し」という表現もある。

・**維摩経**　正しくは『維摩詰所説経』。引用と同じ文がある。『維摩経義疏』が版本として行われた。

（以下次号）

○前回（一）の補訂

明海日本語七号において（一）を出したところ、脱漏・誤解の指摘を頂戴した。ここに訂正をさせていただく。ご指摘をいただいた延広真治先生をはじめとする各位に感謝申し上げる。

●1頁上段後ろから8行目

誤　本作は既に『洒落本大系』・『洒落本大成』に……

正　本作は既に『洒落本大系』・『日本名著全集　洒落本集』・『洒落本大成』に……

●8頁下段2行目

誤　※「家」の字の付く人名・俳名などで構成したでたらめな系図。

正　※「家」の字の付く人名・俳名などを吹き寄せたでたらめな系図。

●9頁下段6行目に次の註を追加。

・分野　天文用語。戦国時代中国の天文学において、天の二十八宿を中国の諸国には伊藤氏、各星宿の地上の支配領域と定めた。

●10頁3行目

誤　京伝が『史記』の原本を……

正　京伝が『史記』の和刻本等を……

●11頁後ろから7行目

誤　昭和まで続いた有名な店

正　昭和四十二年まで続いた有名な店

●12頁最終行

誤　『百人一首嘘講釈』（宝暦十三年）

正　『百人一首虚講釈』（安永四年）

●12頁後ろから3行目

誤　・妙国寺　品川にあった日蓮宗の寺院。

正　・妙国寺　東品川の東海道沿いにある日蓮宗の寺院。

●13頁下段11行目に次の註を追加

・喜撰法師　「ほっし」と読ませている。「ほうし」に同じ。

●14頁8行目　「こう言った」のあとに次の引用文を挿入。

「白玉の役名を最初は喜瀬川と称したが安永八年中村座で瀬川菊之丞の弟子の吉次が勤めて以来白玉といふ」（『歌舞伎細見』）。